

一月研究発表会のご案内（発表要旨）

椿のオホキミ・蚕のオホキサキ

愛知県立大学 大脇 由紀子

対馬の嶺は下雲有らなふ

— 防人における宴席詠寸考 —

廣岡 義隆

平成二十七年一月十一日（日） 午後一時半

於 中京大学 センタービル
（名古屋市昭和区八事本町、地下鉄「八事」出口5番）

美夫君志会

「やさしい万葉集入門」のご案内

当日、上記発表会終了後に、同会場で、左記の催しを開催します。ご期待ください。

やさしい万葉集入門

— 入江泰吉の写真と歩く万葉歌 —

大阪府立大学 村田 右富実

平成二十七年一月十一日（日） 研究発表会終了後

美夫君志会

椿のオホキミ・蚕のオホキサキ

愛知県立大学 大脇 由紀子

仁徳天皇は、即位後人民の家の竈から煙が立ち上っていないことから、人民の貧困を知り、課役を一時免除し、人民の生活状況が回復するまで儉約のために宮殿が荒れても修理しなかつたという。この逸話によって仁徳天皇は仁の精神をもつ理想的な天皇「聖帝」とされ、その聖帝を称える祥瑞伝承をも記す。これらは中国の聖帝思想の影響を受けた聖天子像をモデルとする潤色であると考えられている。その一方で、大后石之日売命は仁徳天皇と他氏族の女性たちとの恋愛に嫉妬し、難波宮から離れた山代国に籠もる。次の歌は『古事記』において大后が詠んだとされる歌謡である。

つぎねふや 山代河を 河上り 我が上れば 河の辺に 生
ひ立てる 鳥草樹(さしづ)を 鳥草樹の木 其しが下に 生
ひ立てる 葉広 五百箇(ゆづ)真椿 其が花の 照り坐(いま
し 其が葉の 広り坐すは 大君ろかも

右の歌謡において表されている「五百箇(ゆづ)真椿」は仁徳天皇を指している。忿怒して都を離れる大后が、ウタにおいては仁徳天皇を誉め称えていると解されるウタである。土橋寛説ではツバキが咲くのではなく、「照り坐し」ていることに「掛詞」的な用法であるとする。筆者も『古事記』天の岩屋戸神話における「照明」と呼ぶ表現と考える。『古事記』において「照」という語にふさわしい花としてツバキが詠みこまれたものであろう。

また、石之日売命にツバキのウタを歌わせるのも「聖帝」にふさわしい「聖后」としての意識を有しているよう。『古事記』仁徳天皇条に強く表れる「織維業」の物語要素を検証しつつ、問題の歌謡について考えてみたい。

対馬の嶺は下雲有らなふ

―防人における宴席詠寸考―

廣岡 義隆

『萬葉集』巻第二十には兵部少輔大伴家持によって採集された天平勝寶七歳(七五五)二月の防人歌が収載されている。この防人歌以外に「昔年防人歌」「昔年相替防人歌」が存在すると共に、巻第十四には「防人歌」の分類下に五首が収載されているが、他に東歌中に防人歌が存在することが知られている。その東歌中に存在する二首の防人の歌について考察する。

当考察は、昨二〇一四年八月三十一日に高岡市万葉歴史館において「防人とその家族」と題して話す機会があった。その内容は、高岡市万葉歴史館叢書27『万葉の愛』の中の一として、年三月にされるのである。その時に、回り上る東歌中の二首について、することがあった。ここではその二首について考察する次第であるが、共、する理解として、防人を、の宴の存在がある。

防人歌の詠のとして「国」での「宴」「国」から難波の中歌二集「難波での宴」という三つの歌、状況が指されている。それは防人歌を、て、けば、に明らかとなる事であるが、兵部少輔大伴家持が、当、国に指したものは「国」での宴における歌の採、であり、その国、での宴の存在は「昔年防人歌」から理解で、るところであるが、現、においては、防人を、り、す宴がその当、から持たれていたと考えられる。

即ち当時における、とは、の、り、わせに存在するものである。これは防人、ることなく、一、に、する、は、ま、神、に、の、を、した。防人の、には現、で三年、防、の、に、く、こと、が、わり、当、ながら、の、神事が持たれたのである。神事、の、会、から宴、と、する、のは、の、ことであり、その国、での神事と宴、は防人の、や、が、かれていたことが防人歌から明らかとなる。こういう理解の下に、巻第十四の三五五、一、歌について考察するものである。